

# 文語の苑

メールマガジン第七号（平成二十四年一月）

小倉百人一首 七 安倍仲麿

天の原ふりさけ見れば 春日なる三笠の山に出でし月かも

古今集に収録されたこの歌は、古来、異郷にあつて帰国できなかった日本人の、懐郷の歌として有名です。作者安倍仲麿の名は、今は安倍仲麻呂と書かれます。

この人、安倍仲麻呂は、後に帰国して政治的に活躍した吉備真備や玄昉と共に、留学生として唐に渡りました。この人の家は、吉備真備等より格が高いので、帰国すれば要職に就いたと思は（わ）れますが、玄昉のや（よ）うに、政争に捲込まれたかも知れません。

仲麻呂は、吉備真備等と一緒に帰らず、唐の役人になって、玄宗皇帝の側近に仕（え）ました。当時の唐は、今で言（え）ばアメリカのや（よ）うな世界第一の大国で、外国人でも出身に関は（わ）りなく、能力を発揮できる国でした。詩文の才に恵まれた仲麻呂は、唐の大詩人、李白や王維と親交を結びます。盛唐の華やかな時代です。長安の都の生活が楽しくて、日本に帰る気になれなかったのでせ（しよ）う。

その仲麻呂も、玄宗皇帝が楊貴妃に迷ひ（い）、政治に関心を失ふ（う）と、日本から来た遣唐使の船に便乗して、帰国しようとする。「天の原」の歌は、当時の明州、今の中国の浙江省の寧波で、日本に帰る船に乗込むときに詠んだと言は（わ）れます。

古今集の撰者の紀貫之は、「土佐日記」の中で、安倍仲麻呂が送別の唐人たちから漢詩を送られ、「日本ではか（二）（う）いふ（う）とき、和歌を詠むのだ」と言つてこの歌を詠み、すぐ唐の言葉に訳して見せたところ、唐人たちは皆感心したと記してあ（い）ます。「唐と日本は言葉は違ふ（う）が、月は同じなのだから、人の心も同じなのだら（ろ）（う）」と、紀貫之は述懐します。

仲麻呂の出發を惜しんで詩を贈つた人の一人が、当時唐の政府の重要閣僚の一人だった王維です。長文の序文を伴つた王維の詩は、「別離方異域 音信若為通）別れて君が外国に行つてしまつたら、どうして音信を通じられるか」と結ばれます。

仲麻呂と同じ船団の中の一隻は、鑑真一行が乗船して居り、何とか日本に辿り着きました。しかし仲麻呂の乗つた船は遭難し、一時は海に沈んだと伝（え）られました。このとき李白が、仲麻呂の死を哭した詩、「日本晁衡辞帝都 征帆一片遶蓬壺 明月不歸沈碧海 白雲愁色滿蒼梧）中国名晁衡の安倍仲麻呂が長安の都を去り、帆船で日本に向つた。所が明月の如き君は碧い海に沈み、秋の白い雲の下は愁ひの色に満ちてあ（い）（る）」では、仲麻呂は、明月に譬（え）（え）（ら）れてあ（い）（います）。

それでも安倍仲麻呂は、このとき海には沈まず、漂流して今のヴェトナムまで流され、陸路、長安の都に帰つて来ます。その後再び唐の政府に仕（え）、最後はヴェトナムの地の節度使を勤めて、六十九才で没します。節度使は、土地の王とも言（え）（る）地位であり、唐に仕へた外国人として、異例の出世でした。

三笠山の月を憶ひ（い）ながら帰国できず、一生を異国で過したとはい（え）、玄宗皇帝に側近く仕（え）て、盛唐の文化を満喫した仲麻呂の、当時としては長かった一生は、決して不幸な一生ではなかったと言（え）（ませ）（しよ）（う）。

# 文語の苑

メールマガジン第七号

## 豊の年 愛國百人一首を讀む(五)

新しき年の初めに豊の年表すとならし雪の降れるは

葛井連諸會

新年明けましておめでたう御座います。昨年は東日本大震災があり、多くの被害が出ましたが、一方で國民相互に助け合ふ「絆」が再認識された年でもありました。また永年に亙り歴史的假名遣を守り續けられた丸谷才一先生が文化勳章の榮に輝き、今年是我が國現存最古の文書「古事記」を太安萬侶が撰録して元明天皇に獻上つた和銅五年から丁度一千二百年に當るなど、國語復活の兆しを感じます。文語「正統表記の復活普及に更に努力する所存で御座います。」

新年早々に雪が降るのはその年の豊作を豫言する、その新年の雪が降りました。今年は五穀豐穰の佳い年になるに違ひありません、といふ掲出の歌は幸先の良い新年を大らかに歌ひ上げてゐます。「新しき」は形容詞「あらたし」の連體形ですが、平安時代以降、現在では「あたらし」と變化してゐることに注意します。「ならし」は「なり」がラ變動詞ゆゑにその連體形に推定の助動詞「らし」が接續した「なるらし」を約めたものですが、同じ推定でも「らし」は根據のある場合に用ゐる助動詞ですから、彌生時代を歴た長い稲作の経験から、陰曆一月頃の降雪が作柄に好影響があると知られてゐたことを示してゐます。

此の歌は萬葉集卷十七にあり、その詞書によりますと、聖武天皇天平十八年(七四五)正月、數寸の積雪があり、左大臣橘諸兄以下作者らが、太上天皇(元正天皇)の御座所の雪を掃ひ、太上天皇から御酒を給はり、雪の歌を作るやう仰せを受けた時のものです。愛國百人一首はこの時の歌を掲出歌以外に二首採録してゐます。

降る雪の白髪までに大君に仕へまつればたふとくもあるか 橘 諸兄

自分の髪の毛が降る雪の白さと同じに白くなつた今日まで、大君に御仕へすることができたことは寔に貴重なことであるよ

天の下すでに覆ひて降る雪の光を見ればたふとくもあるか 紀清人

天の下隅々までも降り積り行く雪の美しさを見ると、大君の御稜威が日本中隈なく照輝いてゐることを示してゐて、寔にたふといふことであるよ。

此の同時に詠まれた三首を、一つの纏まつた歌と見ると如何でせう。稻が豊かに稔る豐葦原の瑞穂國は帝力天の下普く行き渡り、年老いて白髪になるまで國の爲に働くことができる貴い國柄であることよ、此の三首が清らかな白い雪に比へて、見事に歌ひ分けてゐることに氣附きます。さうしてこれこそが我が國柄の基本であり、愛國百人一首に三首を一括採録した理由でもありません。



# 文語の苑

メールマガジン第七号

## 文語歌曲「みがかずば」（和歌の唱歌）

寺子屋といふ私塾による教育が普及してゐた日本で、國による學制の發布されたのが明治五年、今の湯島聖堂に師範學校が小學校教員養成のために作られました。始めてのことなので、教員から教員、教授法までアメリカから導入したものでした。その三年後に東京女子師範學校が設置され、その開校式に明治天皇の皇后（昭憲皇太后）が出席され、御製歌が下賜されました。

### みがかずば 玉もかがみもなにかせむ 學びの道もかくこそ有けれ

この和歌に明治十一年（1878）宮内省の雅樂課により譜がつけられ歌はれたものが、日本における校歌のはじまりとなりました。今でもお茶の水女子大學では、幼稚園から小學校、中學校に至るまでが、校歌としてこの歌を歌つてゐるさうです。御製でありながら、大正二年の「尋常小學唱歌」に載せられました。

\* 磨かずば 「磨かなければ」といふ意味であることはすぐわかりますが、文法の方からは結構厄介な語句です。まともなら「磨かざれば」です。

\* 何かせむ 今時の表記では「せん」になつてゐますが、ここに唱歌「故郷」の「歸らん」の「ん」と同じ問題があります。元々は「ん」のなかつた「いろは」に「ん」が現はれたのは平安末期でした。江戸時代に出來た五十音圖でも「ん」は表外の五十一位です。そしてmとnは發音が違ふにもかかはらず混同して使はれてきました。歌手の藍川由美さんが強く指摘してゐるのですが、「ん」には推量（む）と否定（ぬ）の二つの意味があるので、日本の歌曲、唱歌を歌ふには前もつて どちらの意味、發音かを理解しておかなければ正しい歌ひ方になりません。「歸らむ」はその人の意志でしたが、「歸らぬ」は歸らないとなります。  
\* かくこそありけれ 文語や和歌で終に「れ」が來たら、前にある「こそ」の係結びになつてゐると思つて間違ひありません。強調するときに使はれる助詞で、「このやうに」の意味の「斯く」を強めてゐます。

明治といふのは日本の歴史において奇跡的な時代でした。明治十二年に文部省は「音楽取調掛」を作つて、日本の音楽文化を發展させるための調査をしたり、人材の養成をすることにしました。新時代の多端な時代に、音楽を随分優先させたのが驚きです。しかし音楽を藝術として考へたのではなく、役に立つ文化と見たのです。國民の健康を増進させ、道徳を向上させることが當面の目標でした。明治十一年に作られたこの「みがかずば」の歌など、その方向性をよく指し示してゐると云へませう。音楽取調掛といふ組織は、十年後、「東京音楽學校」となつて、唱歌發展のために大いに役立つことになりました。

# 文語の苑

メールマガジン第七号

文語日誌

なでしこジャパン 平成二十三年八月某日

三月十一日の東日本大震災以降、暗きニューズ世の中を覆ひ盡くすの間、女子サッカー日本代表「なでしこジャパン」の金メダル獲得は、稀に見る快撃と言ふべく候。

過去に二十四回對戦し一度も勝つこと能はざりし米國チームを撃破したるは、奇跡と言ふほか之無く候。

主將の澤穂希選手以下「なでしこ」らの大活躍は、被災地も含め日本國民全體に多大なる勇氣と自信を與へ候處、國民榮譽賞を授與せらるるは、蓋し當然と思料仕り候。

女子のサッカーを始めたるはごく近年のことなれど、そもそも我が國には平安時代より蹴鞠の傳統ありたるを忘るべからずと存じ候。

さて、なでしこ言はば、古來多くの人々に愛でられ候花にて、

萬葉集にては、なでしこを詠める歌二十六首之有り候。

たとへば、山上憶良「秋の七草の歌」には、『萩の花、尾花、葛花、なでしこの花、をみなへし、また藤袴、朝顔の花』とあり候。(なほ、尾花はススキ、朝顔は桔梗の由)

また、大伴家持の、亡き妻坂上大嬢を偲べる歌には、『秋さらば 見つつ偲べと 妹が植ゑし やどの なでしこ 咲きにけるかも』とあり候。

古今集にては、素性法師の秋の歌に、『我のみや あはれと思はむ きりぎりす 鳴く夕かげの 大和撫子』とあり候。(なほ、きりぎりすは「こほるぎ」の意味)

さらに、金槐和歌集にては源實朝の歌に、『ゆかしくば 行きても見ませ 雪島の 巖に生ふる 撫子の花』とあり候。

なでしこジャパン、かかる長き傳統有る「なでしこ」に新たなる息吹をば吹き込みたる、めでたきことに候。



# 文語の苑

メールマガジン第七号

## ナスカの地上絵

千九百八十年、友人三人と共に、南米チリの大使として赴任せる父を訪問すべく、空路ペルーへ向ひぬ。東京より今は存在せぬパンアメリカン航空に搭乗し、ロスアンゼルスにて乗換へたり。リマの街のそこここに迷彩服に身を包み機関銃を携帯したる兵隊を見掛けぬ。ペルーにて寿司屋を営む親方の吾等が面倒を見たり。車にて案内し、治安悪しきにや、降るときはハンドバッグを胸に両手にて抱へ、行先の店まで一目散に走るべしとの指示毎度発出さる。何と恐ろしき街ならむと覚ゆ。

吾等はリマより世界遺産のマチュピチュまで行く予定なりき。クスコといふ恰もスペインに居るやと紛ふ町を経由す。登山列車によらざれば行くこと適め場所なり。リマよりクスコに飛ぶ際国営の航空会社を用ゐる夢民間の飛行機に搭乗すべからずとは、両親の強く戒むる所なりき。そはクスコ標高三千米強にして霧頻繁に発生すればなり。国営は危険あれば飛ばざれど民間は敢へて飛ぶ。丸一日徒にしてクスコにも行ひき、その後マチュピチュへも行ひき。天空の街も圧巻ならむ。

ナスカの地上絵を見るにはチャーター機を借上ぐるを要す。当時は南米には旅行業なければこの旅行は総て吾が手配する所なりき。現地にてはスペイン語を良くせざれば英西辞書を片手に交渉せり。やうやう六人乗りの単発機を借上ぐるを得たり。パイロットは英語を一切介さず、ナスカ上空に至れるとき、彼は地上絵を指しつつ早口のスペイン語にて何やらわめきたつるもさっぱり分からず。恐らく、あれトカゲなり」とか「猿なり」とか言ふならむ。

吾米国に居りしこと六年に及べば英語は米国人並みに適ふも、そは全く彼には通ぜず。遂にパイロットの小父さん吾に操縦桿を握らせ、真ん中の水滴水平を保つやうしっかり持てと指示して、紙に絵を描き始む。吾は揺るる飛行機の怖さに地上絵を見る所ならず。後ろの座席の友人等は、パイロット絵を見せむと幾度も機を旋回せしめため気分悪しくなり全員ビニール袋に顔を埋めぬ。何とか意思の疎通を図り操縦桿は吾が手を離れ、飛行機は着陸しき。

地上絵を研究するドイツ人数学者マリア・ライヒエ女史、その当時七十五を過ぎたりけむが解説するに、地上絵は季節毎の太陽の没する方向にその位置関係すと。絵は紀元前一世紀より六世紀の間に描かれしものとせらる。千九百三十九年に発見さる。その絵巨大に過ぎ、空よりならずは絵の何を描くや計り難し。ドイツ語訛の英語の講釈を一時間ほど聞き、絵の不思議さに圧倒せられつつ軽き食事の後再び機上の人となる。吾等ほとほと疲れ果ててリマのホテルに戻りぬ。

翌日リマを出発しサンチャゴに到着し、タラップを降りしところに父の立ちたるを見出して安堵せり。チリの首都は恰も欧州の如く、ここはげに南米なるやと驚きぬ。